

レイン 外伝

灰暗き廃坑の底で

吉野 匠 Takumi Yoshino



アルファポリス文庫



異世界に存在する大陸、ミュールゲニア。

科学文明の魔手はまだこの地を覆うことなく、廃れつつあるとはいえ、いにしえより伝わる魔法も細々と受け継がれている。

そんな、剣と魔法が支配する世界――

サフィールの乱は収束し、シェルファは玉座に着いた。

東の間の安息を迎えるはずだったレイン達だが、今度は王都近郊のティナート村より、急な救援要請が届く。

人を寄せ付けない森のさらに奥――

ひっそりと忘れられた^{はいこう}魔坑に、魔獣共が^{まじゅうども}巣くっているというのだ！

派遣された警備隊の任務失敗を受け、レインは部下を引き連れて自ら^{まじゅうそうどう}魔獣掃討の任に就く。

何かを隠そうとするかのような、村長の^{そぶ}素振り……そして、^{まじゅう}魔獣の^{そうくつ}巣窟と化した暗い^{はいこう}魔坑の奥――

そこでレイン達は、新たな謎と向き合うことになる。



※度量衡はあえてそのままにしています。



ザーマイン

◆リアグル

レビ湖

ガルドシュタイン

旧ルナン

魔物の島

フェリアーナ

◆ナルスガル

シャンドリス領

リディア

サンクワール

シャンドリス

枯れ谷

◆ザワール

狼の島

魔教の島

聖域

ナシド砂漠
(乾きの海)

◆セレスデア鎮

霧の国

ファヌージュ

◆サンヘム

オドロス

シオリ
スールマグルム

グッセン

ダヤン

テセト

アヴェルーン

ポートフォリス

レイファン

◆クリスタルバレス

ヨーデンセ

シャトワール

ブルガンティ

バルザルグ

MURGENIA

レニ

レインの副官



セノア

レインの副官



メルキュール

正義の味方を名乗る少年



シルヴィア

ヴァンパイア族の
マスター



主な登場人物

レイン

本編の主人公。本人曰く、
「傲岸不遜と常勝不敗が
売りの、世界最強の男」



ラルファス

レインの親友で、
サンクワールの
上將軍



シェルファ

サンクワールの
姫君。
レインに好意を
寄せている



レイグル

ザーマインの王



目次

仄暗ほのぐらき廃坑はいこうの底で 11

ヴァンパイア・マスター 171

あとがき 368

文庫版あとがき 370

灰暗き廃坑の底で

セノアの目で見ても明らかだったが、洞窟の前にはいきなり魔獣がいた。

まだ距離はあったものの、間違いようもなく、しつかりそこにいた。

いかにも腹を空かせていそうな巨大な狼もどきが、何匹もうろついていたのである。しかもこの狼もどき、全身が禍々しい紫色の輝きに覆われており、その体躯ときたら普通の狼の比ではない。

加えて、この距離でさえはつきり確認出来る、あの巨大な牙ときたら！ 大きさとい

い鋭さといい、大の男を丸ごと噛み砕くのに十分そうに見える。

セノア達三人は、木立の陰からそつと問題の洞窟を窺ってみたのだが、しよっぱなから魔獣を見つけた途端、レニが早速「ひっ」と息を呑み、セノア自身も思わず後退りしうになった。本当にそうしなかったのは、すぐそばに自分の主君たるレインその人がいて、堂々たる面持ちで顎を撫でていたからだ。

レインという男は、どんな相手を前にしても常に「どうってことない敵だな」と言わんばかりの態度を見せるのだが、普段はともかく、このような場合にはまことに頼もしく映る。お陰でセノアも、あの魔獣（まじゅう）に対して脅威（きょうゐ）は感じて、それが深刻な恐怖にまでは発展（はつぜん）せずにいる。

セノアの自信の源（みなもと）であるレインその人が、あっけらかんと所見（しよけん）を述べた。

「いやー、ヘルハウンドじゃないか。久しぶりだな、アレを見るのは。なんだ、レニも初めてだったか？」

「……あ、有り難いことに、見たことなかったですね。出来れば、一生見たくなかったです」

青い顔のレニが返す。

ちらつと今抜けてきた森を振り返り、切ない声で進言した。

「もう見てしまったものは仕方ないですが。……將軍、やっぱこれは警備隊（けいぶたい）の領分（りやうぶん）ですよ。自分達が関わる問題じゃないような」

「だから、その警備隊が失敗したから、俺達が来たんだろうが。早くも帰ることを考えてんよ、おまえ。あの洞窟（どうくつ）の中から魔獣（まじゅう）を一掃（いっさう）するまで、俺達は帰れないんだつーの。仮にも將軍と副官がセットで来てんのに、すぐすと戻れるわけなからうが」

なかなか恐ろしいことをさらつと言いつ切る。レニは恨みがましい目でレインを見た。

「しかし、自分で言うのもなんですが、僕はこういう任務に全く向かないと思うのです

よ、ええ。魔獣掃討（まじゅうそうとう）作戦（さくせん）なんて、そんな……聞くだに恐ろしい作戦」

「今更（いまさら）、もう遅いつての」

身も蓋（ふた）もないレインの言いようである。

ちなみに彼の説明によれば、魔獣（まじゅう）という呼び名は本来は魔法も使えるモンスターの総称（そうしやう）なのだが、ややこしいので下級モンスターも全部含めて『魔獣（まじゅう）』と呼ぶことが多いそう。

あそこに残（す）んでいるのがどの程度のモンスターかセノアは知らないが、入り口にいる恐ろしげなヘルハウンドとやらを見るに、あるいは本当の意味での『魔獣（まじゅう）』もいるかもしれない。

セノアはここぞとばかりに主張した。

「何を言われるか、レニ殿！ これぞまさしく、騎士の本懐（ほんかん）ではありませんか。私はここにいてことを名譽（めいよ）に思いますぞ。はっきりいって、やりがいのある任務です。闘志（とうし）が泉のごとく湧くを感じますぞっ」

力強く言い切ったセノアに対し、レインとレニは、期せずして複雑な表情を作った。レインなどは、新品のレーザーアーマーでびしっとキメたセノアを足の爪先から頭（かぶ）のてっぺんまで眺め、ふかーいため息をついた。

なんのつもりだろうか、失礼な。

「……いや、俺はおまえに關しては、別に誘った覚えはないんだがな。来んなどというの

に無理矢理ついて来といて、んな無駄な闘志を見せてもらつてもなあ」
「幾ら主君でも、その仰りようは無礼ですぞ。そもそも、『来んな』などと言うこと
自体がとてとてもとても無礼——」

「あー、いいからちよつと黙れ」

無情にも、発言を封じられてしまった。

「今から、洞窟の内部を探ってみる。魔獣の分布状況を把握しとかなとな。ささっと仕事を終わらせて、とつと戻りたいからな——」

そのまま背を向け、木立の隙間から見える洞窟をじいっと見やるレインである。これ以上近付くと、あのヘルハウンドとやらに気配を嗅ぎつけられるらしいので、まだ距離はだいぶある。

洞穴の入り口が豆粒ほどの大きさにしか見えないのに、こんな距離から中を探れるとは！ さすがは將軍ですわ——セノアは密かに感心した。

だがしかし……すぐにふつと眉をひそめ、レインが首を傾げた。
眉根を寄せ、「おや？」などと呟く。

「どうなさいましたか」

気になったセノアが尋ねると、なおも洞穴を眺めつつ、答えてくれた。

「妙だな……なんか妙な力が加わっていて、俺のエクシードが有効に働かないようだ。内部構造どころか、どんな魔獣がいるのかもよくわからんなー。こりゃあひよつとする

と」

思わせぶりに言葉を切る。

「ひよ、ひよつとすると、どうしました！」

エクシードとはなんですか、と訊きたかったのに、レニがどきどきした顔で先に訊いた。

レインは人の悪い笑みを浮かべ、答えた。

「——こりゃ、なにか想像を絶するモノ凄まじい化け物でも中にいて、俺の力を妨害してるのかもしれないなああああ——」

「や、やめてくださいよ、將軍。じじ、自分にはシャレにならないんですから。本気で怖いです。帰りたい……」

目に見えて震えるレニである。

セノアは声を励まし、

「レニ殿、勇気をもつて当たれば、魔獣などに遅れを取りはしませぬぞ！」

「勇気ねえ……」

レインがなぜかしみじみした口調で言った。

「勇気がありやなんにでも勝てるのなら、誰も苦勞しないわなあ」

抗議しようとしたセノアを抑えるように、さっと片手を上げる。

「待て。あのヘルハウンド共俺達以外に何か見つけたらしい。どっかへ走り去ったぞ」
見ると、なるほど数匹のヘルハウンド達は、なぜか一斉に、西の方角目指して駆けて

行くところだった。

あの洞窟は、通称「ヤラインの森」のほぼ中央にある小高い山の麓に開いている。山とその周囲百メートル四方くらいが、なぜか草木も生えていない荒地なのだ。

獲物を狩るなら森へ行くしか手がないわけで、おそらく今も、食事にでも行ったのかもしれない。

あるいは、セノア達以外の不審者を見つけたとか。

セノアはぐっと拳を握りしめた。

「チャンスではありませんか！今のうちにさっさと中へ入りましょうぞ」

「いや、どのみち魔獣の一掃が目的なのに、別にチャンスでもないだろう」

「あ……そ、そうでしたね」

「とにかく俺は、中の様子が探れないのが気に入らん。というわけで、ちよつと試すか」何をですか？とセノアが問う前に、いきなりレインがさっと左手を水平に伸ばした。

と、その長身から真つ青な魔法のオーラが立ち上り、思わず息を呑む。

この人がルーンマスターでもあることは、セノアにも既知の事実だが、知っていてもルーンも唱えずに魔力の放出が可能なのは、やはり驚くべきことである。

感心してほれほれと眺めていると、レインは青きオーラを纏ったまま、いかにもついでつぱい感じでぼそつと言った。

『雷よ、大地を揺るがす鉄槌となれ。サンダーブラスト！』

……呟いた声は小声に過ぎなかったのに、発動された魔法は小さいどころの騒ぎではなかった。

「ちよつ。将ぐ——」

セノアの視界の隅にレニが大口を開けているのが見えたが（多分、止めようとしたのだろう）どのみち朋輩の声は、天地が裂けそうな雷鳴に遮られた。

レインの眼前にまるで洪水のようなぶつとい光の奔流が生じ、バリバリバリッという凄まじい音と共に一直線に伸びる。

既に視界がホワイトアウトして全く効かなくなっていたが、それでもその剣呑な魔法攻撃が、問題の禿げ山の中腹辺りに命中したのは見えた気がした。

大地に微かな振動が走り、地崩れかと思うようなドーン！という音が静寂を突き破る。

セノアは途中から、あまりの光量に耐えきれず目を閉じてしまったのだが、目を開けた途端、大きく息を吸い込んだ。

魔力エネルギーが通過した空間上には、まだ白いパルスが細かくバリバリッと走っており、さらに例の禿げ山の中腹辺りが大きく崩れている。

セノア自身、まだ青白い残光が目の前でちらついていたままであり、おまけに耳鳴りまでしていた。

「いきなり、何をしますか！」

猛烈に頭にきて、ばしっと抗議する。

「私の目が潰れたら、どうするのですっ。ご無体な！」
「喚くな。そんなことになったら、俺がちゃんと責任取るさ」

——え。次の文句に備えて開けていた口を、セノアはそのまま閉じてしまった。今の発言……本気なのだろうか。思わず、レインの顔をじっと眺める。特にふざけている様子もなく、遠くの禿げ山を観察しているところであり、そのせいかな覚にも胸がドキドキしてきた。

では……もし本当に目が見えなくなったら、レイン様と二人で暮らせるということにつ。

などとセノアが自分の世界に入っている間に、レインとレニの会話は進んでいる。

「セノアさんじゃないですが、いきなりどういうことですか？」

「意味はあるさ、もちろん。中に魔獣がどっちやりいるなら、今の魔法攻撃に反応しないわけないだろ。——ふむ、やっぱり反応があった。ほれ、ちょっと聞いてみる」

レインが耳元に手をかざす真似をする。

すると……例の禿げ山の方——より正確には洞穴の向こうから、低く不気味な呻き声のようなものが湧き起こり、お陰でセノアも我に返った。

まるで、大陸中のありったけの魔獣が、遠くから一斉に呻いているような。その怨嗟の籠もった鳴き声に、身体が震え出しそうになったくらいだ。

「……なんですか、この声は」

「色んな種類の魔獣が、一斉に威嚇しているみたいだなあ。『ふざけやがって。来るなら来てみる、ぶっ殺してやるぜ！』みたいな」

「み、みたいな……て」

さすがにセノアもぞつとした。レニなどは既に顔つきが白っぽい。

レイン一人が実に平和そうにカラカラと笑っている。

「外からの探りじゃわからなかったが、こりゃ思ったより数が多そうだな。良かったな、思いつきり戦えて」

他人事のように言う。

突発的な目眩に襲われつつ、セノアはなぜこんなことになったのか、逐一思い出していた。

そう、今回のセノア達の遠征は、王都から騎行一日程度の距離にある、ティナート村という小さな村からの救援依頼に端を発するのだ……



「あそこに行った者は、みな死ぬるのじゃ！」

見るからに老齡の村長は、いきなりそう告げた。
 レインの表情はぴくりとも変化しなかったものの、すぐ隣に座っていたレニは、明らかに席上で身を引いた。顔にさっと怯えが走ったのがモロわかりである。正直なところ、セノア自身だって良い気分はしなかった。
 せっかく救助に來たのに、いきなり何を言い出すのか、この老人は。

ここは、ティナート村の村長屋敷である。屋敷といっても客間と寢室と居間しかない造りであり、規模はすこぶる小さい。

それでも貧しい村内にあつては、大いに目立つ方である。ほとんどの家ではそもそも寢室などはないし、屋根も葺ききの至つて貧相なものだ。日乾し煉瓦の屋敷とはいえ、ここでは村長の家は豪邸である。

目尻の辺りに、老木の年輪のような深い皺を刻んだ老人は、古びたテーブルの向こうで難しい表情を崩さない。

挙げ句、農作業で日焼けした顔をレインに向け、いま一度きっぱりと言った。

「……わしが童の頃から、あそこには妙な噂がありましてな。当時、村の古老にもよく言われたものですじゃ。『エセトよ、間違つてもあの山には遊びに行くなよ。……あそこにはこわい化け物があるでうううう』と」

村長は老い錆びた声でわざわざ陰気な声音まで作ってくれた。

彼が言う『あの山』とは、ヤラインの森の奥深くにある小さな山らしいが……村長はよほどに嫌っているらしい。いや、この言い様は怯えているのだろうか。

お陰で、今の声を聞いたセノアまで背中の辺りにぞわつと來た。
 反射的に抗議してしまう。

「ご老人、普通に話せばよいではないか。何故に妙な声など出す？」

と、村長の横に座っていた家族——老人の孫娘らしき女性がにこにこ口を出した。
 「おじいちゃん、だいぶボケてますからー。今朝もとくに朝食済んだのに、『朝食はまだか！』なんて言っちゃって。嫌だわあ、あははっ」

底抜けに明るい娘の笑い声に、村長のエセトは気分を害したようである。

「なにを言うか。ボケてなどおりやあせん！　そもそも、あそこが危ない場所だというのは、この村では常識じゃろうがっ」

「えー、でもあたし、子供の頃に何回か遊びに行ったけど、特に何もなかったわよー」
 聞くなり、くわつと目を見開く老人。後退しまくりの白髪が逆立っている。

「こ、この大馬鹿者があつ」

盛大に唾を飛ばし、娘を叱り飛ばす。顔が真っ赤である。テーブルの上に置いた拳が、激情でぶるぶると震えていた。

「ユリアっ。あれほどあそこには近付くなど言うたじゃろうが！　言い聞かせた当時はいつも神妙な顔で頷いとったくせに、なんということじゃ！　思えばおまえは昔時から

小狡い性格じゃったわい。叱つてものらりくらりとかわすわ、畑仕事はさぼるわ、わしの財布からこつそり金は抜くわ」

「まあまあ、内輪げんかは俺達が帰った後にやってくれ」

退屈そうにしていたレインが、さっと割り込む。

村長と無駄に明るい孫娘を等分に見やり、

「だいたいだな、『数ヶ月ほど前から、魔獣が村にまできて家畜を食うから困っている。なんとかしてくれ！』なんて嘆願してきたのはあんたらの方だろ？　だからこうして退治に来てやったのに、いつの間にか引き留めるような話になってるのはどういうわけだ」

「わしは、屈強な王都の警備隊が、大勢来てくれると思うとったんじや。まさか若造が三人ぼっちしか来んとは思わんかったですじや。それっぽっちじや、わざわざ死に行くなもの……年長者として、止めるのは当然じや！」

頑固者の老人に相応しく、村長は実にはつきりと言いつつ切った。セノアは自分が腹を立てるより先に主君のレインの怒りを心配したのだが、意外にも本人は苦笑しただけだった。

「なるほど、俺達の身を心配してね。だが残念ながら、先に派遣した警備隊のヤツらは、既に失敗してるしな。送った十五名のうち、三人が腰を抜かして五人が軽傷、おまけに一人が泡を吹いて失神ときた。洞窟に入って僅か数時間で逃げ出し、王都まで這う這

うの体で引き上げてきたくらいだ。よほどひどい目に遭ったんだろ。歯の根が合わないほど震えているヤツもいたし」

「情けない……」

村長は泥水を飲んだような顔で、声を絞り出す。

「なんのための警備隊だか、わからんわい」

「まあそう言ってるやな。誰もが強靱な戦士になれるわけじゃない。だから、代わりにこうして俺達が来てるだろ？　どのみち、魔獣共は山から一掃されるさ。なにせ、この俺が同行してんだから」

あまりにさらっと言われたので、村長はすぐにはピンと来なかったらしい。だが三秒ほどして孫娘のユリアと顔を見合わせ、こちらの方が上官だと勘違いでもしたのか、セノアに尋ねる。

……心配そうに。

「貴族様、この若者は虚言癖でもあるのかの？　腕利きの薬師でも探して、看てもらった方が良いでしょう」

「はっはっは。薬師に看てもらって治るのか、それ」

またまた意外にも、レインは機嫌良く笑ったが、今回はセノアの方が腹立たしくなった。あまりと言えはあまりな言いようだと思う。

「ご老人、無礼が過ぎますぞ。それと、口の利き方にも気をつけるがよろしい。こ

ここにおられるのは名譽あるじようきやばつ」

名譽ある上將軍なのですぞ！　と言おうとしたのに、テーブルの下でレインにどかっぱかりに足を踏まれ、語尾がもつれた。痛さのあまり涙目になって呻くと、隣席のレインが耳元で囁いた。

「めんどくさいことになるから、いちいち俺の身分なんか明かすなつて！　警備隊の助っ人でいいんだ、警備隊の助っ人でつ」

村長がいよいよ怪しむ顔で聞き返す。

「名譽ある『じようきやばつ』？　そりや一体、なんですじや。怪しい店の類ですかの？」

「あ、気にしないでくれ、じいさん。生粋のサンクワール貴族は、定期的に奇声を上げる性癖があつてな。女性は特にそうなんだ。突然、腰にずんと来るエロい悲鳴を上げたりなさるわけで。夜中とかにやられるとたまらんよな。色んな意味で」

「それはまた――さすがは高貴な血筋というか、難儀な血筋というか。なんともその……雅なことですのう」

信じがたいことに本気にしたらしく、口をパクパクさせたセノアを見て、村長が眉をひそめた。明らかに気の毒そうな目つきである。

否定しなかったのだが、レインが足をぐいぐいと踏みにじったままなので、痛みで声など出ない。

レインはそのまま、勝手に話をまとめにかかっていた。

「とにかく、俺達も任務でな。ヤバそうなら勝手に逃げるから、あんたらが気にする必要はない。せつかく来たんだし、まさか手ぶらでは帰れんさ。……行くなという忠告の他、なんか注意事項とかないのか、じいさん。そもそも、なんでいきなり洞窟の中に魔獣がたむろし始めたんだ？」

「いえ、正直に申し上げると、元から魔獣はいたのですじや。昔から何匹かはあそこに居着いてましてな。おそらくは、棲みやすい環境のせいじやろうが」

老人は遠い目になり、説明を続ける。

「でも、魔獣共は森の獣だけを襲っていたし、ここの住人は森の奥に踏み込むのはタブー視しとつたし、これまでは平和だったんですわい」

ちよつとだけ顔をしかめ、

「……まあ、『おおむね平和』という意味ですがの。なのに、ここ数ヶ月ほどでなぜか魔獣共の数がどつと増えましてな……それに伴い、村の方にも現れるようになったんですじや。村人達の中には魔獣と戦った経験のある者などおらんし、弱り切っておりますわい」

「なるほど……集まった原因は不明と。村人がヤラインの森に近付かない訳はなんだ？　別になんてことない森だと聞いたが」

期せずして、村長と孫娘の顔がふつと曇った。セノアが観察していた限りでは村長はともかく、娘の方は終始にこにこしていただけに、ひどく違和感があった。

「いえ、森に入るだけならそんなに問題はありませんがのう……現にわしらも、燃料の薪を採りにしょっちゅう森へ行きますわい」

やたらと歯切れの悪い口調の村長である。

「ただのう、森の中心——つまり奥まで踏み込むのはまずいのじゃ。昔から、あそこに行くとかクなことにならないのでな。危険と言いつてもいいんですがその」

その時、孫娘がこっそり祖父の服の裾を引っ張るのを、セノアは見逃さなかった。途端に、目が覚めたような顔になり、村長が首を振った。

「……まあ、森の奥に踏み込むほど、魔獣の出現率は上がりますからの。あまり遠出しなないのは、そのせいもありますわい」

怪しい、とセノアは思う。

いや、人里離れた森に魔獣が出るのは別に普通のことだそうなので、老人の説明には不審な点はない。ないが、この二人は何か隠している気がする。

自分が気付くくらいだからレインは当然勘付いただろうと思いい、セノアはレインの横顔を窺う。

……いつもながら、何を考えているのかさっぱりわからなかった。つまり、いつも同様、不敵な表情を崩していない。

しばらく村長と娘を見比べた後、レインはついつと肩をすくめた。

「ふーん？ まあいい。問題は洞窟に巣くう魔獣共だろ。そいつらはどのみち、俺達が

追い出してやるさ」

「だから、あそこ二人で行くなどもつてのほかじゃと！ こうなったらはつきり言いますが、そもそも魔獣騒ぎの他にも、元々あの洞窟は問題があつてじゃなつ、あそこに行つた者はもがっ」

なぜか孫娘のユリアが、村長の唇を手で塞いだ。

「……行つた者はなんだ？」

レインの問いに対し、ユリアが答える。

「あ、あははっ。おじいちゃん、最近は激しくボケてますからー。夜中に何度もお手洗いに立つし晩ご飯はボケて二度食べるしい。嫌だわ、恥ずかしいわ」

孫娘の言いように、憤然たる表情になった村長だが、娘の方が力強いのか、手を振り切ることは出来ない。

ふっくらした笑顔の、しかし薄緑の目だけはまるで笑っていないユリアが、早口で言う。

「そ、それではよろしくお願いしますね。ティナート村の安全のために、ぱぱっと魔獣を片付けちゃってください。お願いします、お願いしますね、騎士様あ」

……額に汗をかきつつ、追い出すように告げるのだった。

あの村長と孫娘のことを思い出し、セノアが改めて首を傾げていると、同じことを考えたのか、レニが意見を述べた。

「今更ですが將軍、村長のあの孫娘、なーんか隠そう隠そうとしてましたよね。今からでも戻って、ちゃんと話を聞き直した方がいいんじゃないですかねえ。なんだか、狼の巣に頭から飛び込むような嫌あーな予感がするんですが」

「馬鹿だなあ、おまえ」

レインはしれっと返した。

「狼の巣の方がよほど可愛いつて。これから行くあそこはおまえ、文字通り魔獣の巣窟だぞ。普通は、生きて帰れる可能性の方が少ないだろうが。念のために、遺書をしたためておいた方がいいぞ」

「だから、不吉なことを言わないでくださいよ、將軍。益々行く気が失せるじゃないですか」

レニがげんなりと反論する。

「本当のことを教えたまでだ。とにかく、日が暮れる前にさっさと片付けよう。そろそろ」

行くか——とでも言おうとしたらしいのだが、レインは続きを述べる前にふっと口をつぐんだ。

背後を振り返り、「どこの馬鹿が知らんが、こちらへ向かってくるヤツらがいるな」

と呟いた。

セノアはさつと腰の剣に手を伸ばし、レニもまた、おどおどしながら双剣の柄をまさぐる。

しかしレインは首を振って見せた。

「いや、警戒する必要はないだろう。こりや……ただの人間だ」

セノアはレニと顔を見合わせ、眉根を寄せた。

村人は、ここへは近付かないはずではなかったのだろうか。

——待つほどもなく、細い森林道の向こうから、問題の集団が見えてきた。総勢五人、全員が武装しており、さらにはチェインメイルやらレザーアーマーやらを纏っている。どれも使い古した感じの漂う軍装で、そこそこ戦い慣れた傭兵といった風情である。

レインが何も語らないので、二人も黙したままで一行を待つ。なぜか彼らから隠すように、レインがセノアの眼前に立ち塞がった。なんのつもりかと思ったものの、セノア自身、特に彼らと話したい気分ではないので、抗議は控えておく。

身長も体格もバラバラの彼らは、レイン達を見るなり急ぎ足でやってきた。

「おい、おまえら、さっきの閃光を見たか？」

リーダー格らしい若者が訊いた。ぼさぼさの髪と不敵な面構えをした青年である。

セノア達は二人してレインを見たが、彼はまた見事にすつとぼけてくれた。
 「いやあ、俺達もいま来たところだからな。閃光だつて？ 知らないなあ、そんなの」
 「そうか……この辺りからだと思ったんで、大急ぎで見に来たんだが」

そこでやっと、若者はレイン達をじろじろ眺めた。

「ところで、おまえらも魔獣退治か」

「そういうあんたらも……らしいな」

「おうよ。俺あトランターって名でな、中原の方じゃ割と名前が売れてんだぜ」
 無駄に胸を反らす若者。

「南部へ来て間はないが、いきなりいい仕事にありついたモンだ。魔獣退治としちゃ、なかなかの報奨金だったからな。ギルドで依頼されたメンバーは他にもいると思うが、まあ俺達が一番デカイ獲物をいただくぜ」

なんの話だ、とセノアが問い返すより先に、レインが当たり前のように答える。

「いいさ。俺達はおこほれに預かれればそれでいい。大物はあんた達に譲る」

「嫌でもそうなるだろうさ。多分、さっきの白い閃光も、魔獣の仕業だろう。魔獣の中には魔法を使えるヤツもいるからな。怪我したくなかったら、せいぜいみんなの後から来るんだな」

傲慢なトランターの発言に対し、まるで合唱するように他の四人が笑う——いや、一人だけセノアを見ていぶかしそうな目つきをした。

「……おい、その女の目、ありや確か」

などと言いかけた途端、ぎらっとレインが睨む。セノア自身が答えるよりよほど早く、しかも睨まれた相手が喉を鳴らすほどの迫力があつた。

「ああん？ 目がどうしたって、ギル」

「い、いや……別になんでもない。目にゴミが入ったなあって」

レインの迫力に吞まれたらしく、ギルと呼ばれた男はセノアから目を逸らした。

「おいおい頼むぜ。これからが本番だからな。他のグループに先を越されたらたまんねー。しっかりしてくれよ」

「わかつてる、わかつてるよ、トランター。体調は悪くないから安心してくれ」

「だいたいおめーは——」
 がやがやと話しつつ、傭兵の集団はぞろぞろと歩み去った。もはや、レイン達など全く興味もなくなつたらしい。

「どういことです、將軍」

セノアは早速、訊いた。今までずっと我慢していたのである。

「依頼がどうのと言っておりましたが……彼らも村長から依頼されたわけですか？」

レインはなぜか、セノアではなく、レニの方を見た。

レニが肩をすくめたのを見て、にやつと笑う。

「ああ……おまえもそう思うか」

「將軍！ 尋ねているのは私ですぞっ」
 「わかってるって。怒るな。俺達は元々傭兵だったからな。レニや俺はすぐに察しがついたのさ」

つまりこういうことだ、とレインが解説してくれた。

「最初に警備隊に魔獣退治を依頼したけど、それは見事に失敗しただろ？ だからあの村長——いやひよつとしたら、やたらとしたたかそうだった孫娘の方かな……とにかくあいつら、悪知恵を働かせたらしい。王都に再救援を依頼すると同時に、傭兵ギルドにも依頼を出したのさ。もちろん、有料で。どちらでもいいから、魔獣退治が成功したら儲けものだと思っただろう。こりゃ、他にもああいいう連中が来てるだろうよ」

「無礼なっ。つまりそれは、我々を信頼していないということではないですか！」

「今までの貴族政治からして、そりゃ信頼なんてされてないわな」

レインは至極あっさりと言う。

「それは仕方ない。頼りにならなかったのは事実なんだから。これからしっかりと違いを見てもらえばいいさ」

あまりと言えばあまりな意見のレインに対し、レニが苦笑気味に返す。

「……とか言いつつ、今の彼らを止めませんでしたね、將軍」

「まあな。俺は態度のデカイヤツは決して嫌いじゃないが、実力が伴ってない場合は別だ。発言には、それなりに責任を持ってもらわんとな。口だけなら誰にでも言える」

世界で一番態度がデカそうなくせに、堂々と言う。と、セノアの考えを読み取ったのか、レインにぎろつと睨まれた。

「おまえ、まさか俺とあいつらを比較しているわけじゃあるまいな？」

「いえ……そんなことはありません。しかし、彼らの実力が不足というのなら、先に行かせて良かったのでしょうか」

だいたい、なんで見ただけで彼らの実力がわかるのだろう。

「調べたところじゃ、この森にはそんな強い魔獣はいないようだし、大丈夫じゃないのか。そもそも、先に行って掃除してくれるなら、それはそれで助かるだろ。俺達の仕事も少しは楽になるかもしれないしな」

レニが「やつぱり！」と言いたそうな顔をしていたが、セノアは純粹に驚いた。あまりにも極悪な意見に、顎が落ちかけたくらいだ。

「さすがにそれは……あんまりな意見だと思うのですが」

「傭兵がギルドから依頼を受けて仕事するんだから、俺が保護しなきゃいけない義務なんぞないね。ヤツらは商売でやってるんだしな。それに、さっきも言っただろう。俺は、実力の伴わない大言壮語は嫌いなんだ」

レインは平然としたものである。

「まあ、あいつらじゃ歯が立たないような魔獣がいたら、俺がなんとかするさ」
 「それならよいのですが……」

話がまとまったところで、とレインは大きく伸びをする。
コキコキと首など鳴らし、「俺達もボチボチ行くか」と言った。

森を抜けると、言語道断な唐突さで草木の緑が消え去り、足下は小石混じりの荒れた大地のみになった。

所々で雑草が顔を出してはいるが、なぜかこの辺り一帯を覆うほどには生えていない。伸びるそばから枯れているようだ。

ぽっかりと空いた広場のような場所の中心に、例の小高い丘というか山が鎮座している。子供が砂を固めて作った山をそのまま巨大化したような見てくれであり、どうも人の手が加わっているようにも見える。

そして、例の洞窟が行く手にぽっかりと口を開けていた。三人とも、なんとなく入り口の前で立ち止まり、辺りを見渡した。

……誰もいないし、何もない。

周囲を囲む森は静寂に包まれており、かなり遠くから野鳥の鳴き声がするくらいだ。ただし、この近辺からは物音一つしない。不自然なほど無音の世界だった。

唐突にレインが言った。

「村長達は言わなかったけどな、この山は元々、鉱山だったんだ」

セノアが驚いて顔を向けると、ニヤツと笑って付け足す。

「俺だって下調べくらいはしてるさ。まあ、大したことはわからなかったがな」

「鉱山というと、何か貴重な鉱物でも出るわけですか。えー、この」

とレニが山を見上げて、

「――愛想のない山に？」

「ああ。魔法石が出る……いや、もうほとんど取り尽くされたらしいから、『かつては出た』だな」

セノアの顔を見て、レインが説明してくれた。

「魔法石っていうのはだな、文字通り、魔法の元となるマナが含まれた石のことだ。岩盤の全部じゃなくて、所々にマナを含むわけな。そこを採掘して、さらに持ち運べるように削って使うわけだ。ルーンマスターの補助アイテムとして重宝するし、そういう人種が激減した今もお、結構な値段で取引されている」

「もしかすると、この洞穴は地下に向かって掘られている――そういうことですか？つまり、見た目以上に奥行きがあるんですね」

「そういうこと。おそらく、下へ下へと掘ってあるだろうよ。なぜか地中深くなるほど、強力な魔法石が取れる可能性が高いからな」

「……そして、人間達がせっせと広げた坑道跡に、魔獣がやってきて棲み着いたと」

レニが後を引き取り、顔をしかめた。

「自分達には迷惑な話ですね、全く……余所へ行けばいいのに」

「それなんだがなあ、どうも納得がいかん」

レインは微かに眉をひそめ、今一度、ぐるっと辺りを見渡した。

「餌は森の獣を襲えばいいし、確かに人間の目から隠れ棲むにはもってこいだ。しかし、森からだいたい距離のある村にまで姿を見せるつてのは、明らかに増えすぎだろう。種族が違えば争いも起こるだろうし、普通は増殖に歯止めがかかるんだがな。こんなトコ、何が何でも居着くほどの魅力があるか。どう見てもシヨボい鉱山跡にしか見えんぞ」

レインの視線を受けたレニが首を傾げ、セノアも首を振った。だいたい、この中で最も魔獣に詳しそうなのは、他ならぬレインその人なのである。彼にわからないことが、自分達にわかるはずもない。

「むう……頼りにならんヤツらだ」

主君とはいえ、失礼な放言をするレインに対し、全然別の方角から応答があった。

『それより例の噂をご存じですか、皆さん』

唐突な声にぎよとして、セノアの背筋がびしっと伸びた。何事かと思う。

レインのみは声が聞こえる一瞬前にさっと振り返ってはいたのだが、その表情には明らかに緊張が窺える。そういうこと自体が減多にあるものではなく、普段ならセノアは

そちらの方に驚いたに違いない。

しかし、不意を突かれたのはセノアもレニも同様であり、レインに倣って一斉に振り向いた。

僅か数歩ほど先に、一人の少年が立っていた。つい先程まで、そこには確かに誰もいなかったはずで、それはセノアだけではなく、他の二人も確認していたのだ。

しかし現に彼はそこに立っていて、優しい笑みで一同を——いや、正確にはレインを眺めていた。

身長はレインよりやや低く、生気に溢れた黒い瞳と、同じく漆黒のつややかな髪をしている。単に端整というより、なにか芸術的に整った顔立ちの少年だった。

先に声を聞いていなかったら、すぐには性別の判断がつかなかったに違いない。それほど線の細い、儂げな容貌をした少年なのだ。大きな瞳だけを見ても、まるで女性のようである。

しかし、レインはそんなことはまるで気にならないのか、低い声で問うた。

「誰だよ、おまえ」

「正義の味方です……自称ですけど」

くすつと笑う少年。だがレインは、そのたわけた物言いには興味も示さなかった。「質問を変えよう。いつから接近していた？」

セノアはぎよつとしてレインを見た。

……となると、この少年は本当にレインの意表を突いたのだ。そんなことが可能だとは、セノア自身、想像したこともなかった。特に、レインの強さを知ってからは。

何より、あんぐりと口を開けてレインの横顔を眺めているレニを見れば、それがどんなに有り得ないことだったかわかる。

だが肝心の少年は、笑って答えた。

「普通に、あそこの森を抜けて、たった今来ました……。驚かせたのなら失礼しました。おそろく、この場所のせいでしょう。殺気だった魔獣がたくさんいるし、優秀な戦士といえども感覚が狂うのですよ」

「確かに、妙にエクシードが妨害されるのは感じていたけどな——」

エクシードとは何を指すのか、セノアには不明なのだが。

しかし素直に賛成しつつも、レインは鋭い目で少年を観察している。まるで、彼の心底を見極めんとするような目つきである。

ただ、少年の方は何のこだわりも持っていないようだった。

防寒のために羽織っているのか、純白のマントをばさりと捌き、深々と一礼する。礼儀正しさというか、ある種の育ちの良さを感じた。

「はじめまして、皆さん。僕はメルキュールと申します。……よろしければ、皆さんのお名前も教えていただけませんか」

「……レイン」



まず最初にレインがぶすつと答え、釣られてセノアとレニも口々に名乗った。それまでは、レインと少年のやりとりを息を詰めるように見守っていたのだ。よろしく、などと平和な挨拶を交わした後、少年はちよつと小首を傾げた。癖のない黒髪がさらさらと流れる。

「うーん、どこかで聞いたお名前のような気がしますね。僕はこの地方の者じゃないけど、なんとなく」

誰も何も答えなかった。

セノアは、逆に自分から尋ねた。

「ところで、メルキユールとやら。貴方も魔獣退治に来られたのか？」

「いえ、僕はあまり戦いが得意じゃないので」

儂々な笑みを浮かべ、予想通りの返事だった。

「今はただ、皆さんがこの洞窟へ向かうのを見て、止めた方がいいと思ったのです」

「例の噂がどうか言いかけたな、さつき。それを教えてくれようとしたのか」

「その通りです」

口を挟んだレインに対し、メルキユールは神妙に頷いた。

「村長さんは、おそらく教えなかったんじゃないでしょうか。この洞窟——いえこの鉱山跡の周辺で、しきりに人が消えるのを」

『人が消える!?!』

立ち読みサンプル はここまで

セノアとレニの声が重なり、レインのみが、「神隠しでも起こってるのか？」などと述べた。

神隠し……また聞き慣れない言葉だ。レインは時折、こういう謎の名称を使う。少年もちよつと小首を傾げたが、こちらは簡単に頷いた。

「聞き慣れないですが、意味はわかるような気がします。そう、多分そういう現象です。原因はよくわかりません。この洞窟の近辺に向かったとおぼしき人達が、次々と姿を消す……そんな事件が頻発しているんです」

「も、森の中で道に迷って行き倒れになったんじゃない？ ええと、随分と深くて広い森みたいだし、ここ」

レニが遠慮がちに意見を述べる。

メルキユールは微かに首を振った。

「もちろん、村人達だってその可能性は真つ先に考えましたよ。しかし、村人全員で森中を探しても、なんの痕跡も見つからないんです。一人だけならまだ納得も出来ませけど、ここは昔から、何人もの人が忽然と消えているそうです。しかも行方不明の人達は、全員がこの近辺で消息を絶ったという噂です。もちろん本人達がいらない以上、断言は出来ませんが、行方を絶つ直前に同村の住人に出会った人が幾人かいて、彼らによると、その人達は例外なく森の奥に向かうところだったと。——森の奥といえは、つまりここですよ」